仏教企画通信
75号
発行日｜令和6年3月1日
発行所｜有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax.042-782-5117
発行人｜有限会社 仏教企画代表　藤木隆宣
編　集｜加藤順子
Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

内山節先生インタビュー

戦争のない世界への思考

「国家」を離れた仏の教えから「国家」を見つめ直す

聞き手：矢田海里

ロシアによるウクライナへの侵攻など、戦争によって世界が不安定になりつつある現代。混迷の時代に私たちは、何をどのように考えていくべきか。哲学者の内山節先生にお話を伺いました。

――戦争と言っても、漠然としています。どこから考え始めればよいのでしょう？

まず、こうした大きな問題を考えるときにお伝えしたいのが、根源的な解決を考えるということと、現実的な解決を考えるということは、イコールではないということです。例えば、今の社会を見ると、ホームレスの人、シングルマザーの人、それぞれの問題を抱えている人がいる。これらの解決としては、とりあえずその人たちが生きていく場所を用意する。あるいは生きていける仕事を用意する。そうしなければますます破綻してしまうわけで、これが現実的な問題解決です。

ところが根源的な問題を含めて考えると、別の大きな問いも含まれてくるわけです。例えばシングルマザーの問題を一つとっても、家族制度はどうあるべきか、人々の違った生き方はないのか、お金を稼がなければいけない社会のありようは本当に正しいのか、など様々な可能性があるわけです。ただ、いま目の前で現実に困っているシングルマザーの人に家族のありようの話をしても、解決にはならない。ですから片方では現実的な解決策を一生懸命模索していくことが必要です。しかしそこで終わりではなくて、根本的な問題が残るわけですよね。

戦争についても同じことが言えます。例えば今度のウクライナ戦争でも、どう考えてもロシアが一方的に攻めて始まったという話です。これでロシアが何らかの利益を得るというのは、どう考えても不当な話ですね。すると、可能な限りウクライナを支援しながら、ロシアの敗北を期待するしかない。

ところが、そうすれば全て解決するのかというと、それだけでは戦争が繰り返される世界のありようには変化がない。本当に戦争がない世界を作ろうと思った場合、どうしたら良いのか、という問いは残るわけです。

――現在の日本に住む私たちは、どんなことを考えていくべきでしょうか。

現在の日本の状況に照らして現実的に考えると、問題になっているのが中国の動向と言わざるを得ない。もしこっちの都合だけで全て決めていいのであれば、絶対平和主義が一番いいに決まっています。つまり絶対戦争はしません、戦争に必要な軍備を持ちません。これで押し通せれば、それが一番良いでしょう。ただ実際にはちょっとそれが許されそうもないような現実が展開している。

日本という国はけっこう軍備のある国なのですが、それをもっと拡大して、ついには原爆まで持とうという話になってしまうわけです。この尻馬に乗るわけにもいかないし、ということで皆さん困っている。

わたし自身は、現実的な解決策として「待つ」という選択があると考えています。中国の今の体制はそう長くは持たず、必ず瓦解するときがくる。というのも、いま中国はものすごい監視社会ですから、経済に少しガタがきてしまえば、国民としても我慢できなくなってくるだろうと。国民からすれば、ある意味で中国共産党の奴隷になる代わりに、経済的発展を手にするという、そんな社会ですから。中国の歴史は何度も民衆の大反乱によって変革がもたらされているので、今後も多分そうなるでしょう。

だからそのときを待てば良いわけですが、ただ、待っているうちに向こうから攻撃してくる可能性はないとは言えない。するとどんなことが必要になってくるか。ひとつには、相手を攻めることよりも、徹底的に防衛するだけの兵器の開発ができないだろうか、ということです。

今、日本はアメリカの軍事力のコピーをやって、相手を叩き潰すための能力に重きを置いている。そうではなく、相手に円滑に攻めさせないための軍事力。それは今の技術でもできるでしょう。例えばドローンひとつとっても空中ドローンもあれば、水中ドローンもある。何百万機ものドローンを打ち上げて、妨害電波なんかを出して、それで相手のミサイルの軌道が狂ってしまうとか。そうした一種の妨害軍事力みたいなものに徹する。これが、中国が瓦解するときを待つための軍事力です。

もうひとつは、待てる体制を作るために、対決だけではなくて、中国や周辺諸国とどういう関係を作り、交流を持つのか。それも向こうが瓦解するのを待つための策略として、模索が必要になる。これが現実的な問題の対処です。

――それでも根本の問題は残るということでしょうか？

そうですね。これだけでは解決しない、別の問題が残ります。今度のウクライナ戦争にしても、仮にウクライナが勝って、ロシアが負けた場合に、ウクライナがウラル山脈から東の世界の盟主になってくるかもしれない。古い言葉を使うと、ウクライナ帝国主

義みたいなものが発生してくる可能性は十分にある。そういうことを繰り返してきたのがあの地域でもあるわけです。

つまり根本的なことを言うと、国家が存在する世界では、必ずまた戦争が始まるときがきてしまう。そう考えると、国家の持っている力そのものを低下させる仕組みを考えていく必要があるわけです。

宗教的な話を織り交ぜていくと、仏教はキリスト教とは違って、こうした状況に対して、大きなヒントをもたらしてくれます。というのは仏教では現実的に構成された世界を一つの虚無として捉えるわけです。それが仏教の持っている宗派を超えた共通性です。根源的なものというのは、現実世界では捉えきれないし、言葉にできない。そういう世界にこそ本質がある。それをつかみ取っていこうとしたのが仏教なわけですが、そのつかみ取る方法は、宗派によって様々だったりする。ただ共通することは、現実世界、人間達が作り上げたこの人工的なものを虚無として捉えるというところ。この発想からすると、国家というものは虚無もいいところで、それを本当に虚無と言えるようにしていこうとすると、どういう道筋があるのか。そこを探らなければいけないということです。

――仏教の教えにこそ、糸口があるということですね。

象徴的に現れているのが、お釈迦様が修行をしようと思ったときに、国家を捨てているということです。彼は（釈迦族の）王子様だったわけですが、家族を捨て、国を捨てた。つまり国の中で生きることを捨て、その後、どこの国にも帰属していない。すなわち国というものに自分たちの生きる本当の世界はない、ということを示しているわけです。

あるいは一遍上人にしても「どうやったら悟りが開けるのか」と聞かれて、空也上人がむかし言っていたことを引き合いに、「捨ててこそ」と言った。全てを捨てるそのときに、初めて悟りの道が現れるということでもあるわけです。

言い換えれば、「捨てていく思想」というものを仏教は持っているわけです。現実世界を捨てていくときに真理が見えてくる。とはいえ、家族を捨てるといっても別に家族と離縁しなくても良くて、いわゆる現実世界の家族のありようを捨てる。つまり違う家族のありようが見えてくる、ということでいい。何かそうしたヒントを与えてくれる思想を仏教は持っているわけです。まただからこそ、こうした問題提起をしていけるような仏教でなければ、とも思っています。

――「キリスト教にはなくて」というところをもう少しお伺いできますか。

キリスト教は成り立ちからして国家が絡んでいる宗教といえます。そもそもユダヤ教というのは、国を持たない民族に対して、ユダヤ教を作ることで、彼らを繋いでいく仕組みを作ったわけです。同時に、ユダヤ人だけが神に選ばれた民であるという。だから一つの領地のような国は作らなかったけど、ユダヤ人というひとつのまとまりを作ったわけです。そしてそれを改革する形でキリストが現れ、キリスト教ができていくのが西暦300年代です。

実はそれまでの古代ローマでは、キリスト教も含めて、コプト教などの宗教を弾圧していました。なぜかといえば、皇帝絶対の世界を作ろうとしていた中で、神に従う人がいるということが、皇帝としては都合が悪かったわけです。

ところがローマがゲルマンの侵攻を受けたりして力を失い始める。そのときにキリスト教を国教化することによって、神の信託を受けるという形で、もう一度皇帝の権力を確立しようとした。そのためにキリスト教を公認して、国教化を図った。そうした経緯で今のキリスト教が生まれたわけで、その成り立ちからして、政治権力と宗教は簡単には切れない関係にあったわけです。

それから仏教においては、キリスト教における神と人間のような「縦型の関係」を持つことがありません。キリスト教においては、神がいてその下に人間や動物がいる。これは全部「縦の関係」だと言えます。

ところが仏教においては、こうした縦型の支配関係は成立しないわけです。日本の信仰もそうですが、「横」なんです。日本の信仰で言えば自然とは横で繋がっていて、その自然に我々人間は恵みも受けるし、時には大災害を被ることもある。仏教でも、その横繋がりの世界の中で悟りを開いた人が仏。ですから悟りを開いた人がいても、我々の上に行って「縦の関係」になるわけではない。言い換えると、私たちもまたいつか悟りを開くはずのものとして位置づけられているわけです。簡単に言えば釈迦にできたことは俺にだってできるんだ、という世界を作っているわけです。だからいくら優秀なお坊さんが悟りを開いても、やっぱり横にいる「偉い人」であって、上に立つ偉い人ではないわけです。

――国家の力を低下させるという一方で、自分自身の帰属先を国家に求める人も少なくない。これは反対の動きだと言えますか？

これは（個人の）帰属先がなくなったから、国家に幻想的な帰属先を見出そうとするわけです。国家というのはベネディクト・アンダーソンが言っている通り、「想像の共同体」、想像が作り出した共同体だと言えます。（本物の共同体の役割は果たせない。）本物の共同体というのは、例えば、僕が何かで困ってしまって、藤木さんに電話する。電話したら藤木さんがすぐに来られる体制かどうかは別として、何らかの方法を使って駆けつけてくれる。これが共同体というものなわけです。

私の知り合いで農水省のキャリア官僚の女性が、岩手県の村で働くことになって、そのまま現地で結婚して、辞表を提出して暮らし始めた。という話をしてくれました。彼女が言っていたのは、自分が病気になったときに近所の人たちがご飯を作って持ってきてくれたりして、助けてもらったということ。インターネットでSOSを出しても誰も来てくれないけど、日々顔を見ている近所のおじいさん、おばあさんが駆けつけてくれた。共同体というのは、そこにこそあるわけです。

一方で、国家は何にもやってくれない。困ったといっても、せいぜい健康保険組合に入っていれば、保険証が使えますというだけの話です。戦争が始まれば、若ければ戦争に来いと招集令状を出してくるかもしれないし、年配の人にも特別税関が「支払え」と言ってくる可能性もある。一方でこっちが困っているときに、誰かが駆けつけてくるわけでもない。本当の共同体ではなくて、創造の産物、幻想の産物にすぎない。だから虚無でもあるわけですね。その虚無性をはっきりさせていくことが重要なわけです。

内山　節（うちやま・たかし）
哲学者。1970年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』（全15巻、農文協）『半市場経済 成長だけでない「共創社会」の時代』（角川新書）他多数。

矢田海里（やだ・かいり）
1980年千葉県生まれ。東日本大震災直後に現地入りし、現地に居を構えながら被災した人びとの声を拾う勝央を続ける。ユネスコなどと共同し、全国で震災写真展を16回開催。著書に『潜匠』（柏書房）ほか。

宗門の引導香語雑観

千葉県柏市　龍泉院東堂
椎名宏雄

私が法事や葬儀の際における香語の一転語を「喝」の一点張りとしたのは、臨済宗からの影響である。その嚆矢は、多分私の親族の葬儀の頃であって、臨済義玄の四喝とは関係ありません。

私の母トキの姉、つまり伯母は秩父市に居住していて、昔は市の税務署長をしていた関根仲曹という立派な名前の伯父の妻であった。伯父は後に市の助役になった人で、永く市の官舎住まいをしていた。伯母の名はトメさん。がっしりした体格で、絶妙な美声の持主であった。市の婦人会長を永く務めていて、昭和天皇の弟君に当たる秩父宮様が秩父市を訪れた時は、よく案内役をされていたそうである。

トメさんやトキの生まれは神奈川県厚木市の曹洞宗檀家。相模川の上流で川が二股に分かれる才戸という地区の遠藤家であり、川の分岐点は魚が集まる所から、川口屋という鮎を目玉とする料理屋であった。川口屋は明治初めの創業というが、大正頃は店の最盛期であり、遠藤家は10名以上の家族が比較的恵まれていたという。トメさんは第三女、私の母トキはその妹で第五女であったが、当時は店にいた8名の女中にかしずかれていて、トメもトキも厚木の高等女学校を卒業しているが、片道7㎞もある路程の往復は、何と人力車通学であった。当時はいわば深窓のお嬢さんたちであった。

時光は容赦なく流れ、無常の風は間断なく吹き、トキの急逝は昭和27年であり、関根家夫妻の物故は昭和末期であった。トキの生前、トメさんは秩父から3時間もかけて、私の柏市郊外の農村にある龍泉院までよく来てくれました。

が、姉妹の仲はとても良く、姉は妹を「トキさん・トキちゃん」、妹は「姉さん」と呼び合っていた。だから私は両者の睦まじい会話をよく見聞していた。

関根さん夫妻が他界したのは、昭和末年であり、私の50代の頃であった。当然秩父へ行き葬儀や追善供養に参列したのであるが、忘れられないのは、葬儀の際に近親者が頭上に被る「オカンムリ」と称する半紙を折って作った白色の小帽子である。これは彼の地に伝わる昔からの習俗であり、女性は仕方が若干違うという。菩提寺は臨済宗妙心寺派で、お経は『般若心経』・『大悲呪』・『修証義』などで曹洞宗とほぼ同じであるから私は一緒にお唱えできたのであるが、導師さんの引導・香語の迫力には圧倒される思いであった。声量も迫力の点でわが宗門とは違う。それは正に目を見張る如き思いであった。

この秩父での体験を期として、私は臨済宗系の法儀に著しく注目するようになった。といっても、千葉県柏市近辺には臨済系の寺院は暁天の星の存在であり、無用でノコノコと出掛けて行くこともできない。だから彼宗の法務に列席するチャンスは極端に少ない。秩父の後は小さな農家の葬儀に一回、大きくは故鎌田茂雄先生のご葬儀（鎌倉）に回葬した時ぐらいのものであった。だが、回数よりも内容の見聞である。臨済系の法儀は押し並べて、鼓鉢などの鳴らし物は弱い。わが洞門の方がはるかに洗練され、整然としているのに対し、済派は概して緩慢であり懶惰に近い。ところが香語や一転語になると疾風迅雷の到来を思わせ、洞門の懶惰緩慢を圧倒する。この極めて対照的な相違は、長年月の間に培われた宗風の相違といえばそれまでであるが、問題の核心は、見聞した列席者の外面的感覚ではなく、引導や香語を受ける故人が如何に安心を得、成仏に引接・導入されるか、という内面的な通力であろう。

私の寺の檀信徒の中には、葬儀の時に何時住職が大声を出すかと身構えていても、現実に発声されるとブルッと震える、という声を何度も聞いている。やはり「喝！」にはそれだけの「ちから」があるのだ。それと、見聞する者の満足を呼び起こす「ちから」が具わっているのだ。

臨済系の迫力といえば、これも忘れることのできないのは、かの柳田聖山先生への追悼法要である。あれは先生がご遷化されて間もない四十九日頃であっただろうか。会場は先生が半生涯も永らく教鞭を執られた京都花園大学の講堂においてであった。大勢の参列者の中で、駒澤大学関係からの出席は、意外にも少なく、私と小川隆先生との二人だけであったのは驚きであった。それはともかく、会場には花園大学や臨済系統の要職者が当然ながら席を埋め尽くした。僧形の方と在俗の方との混成ではあったが、次々に行われた追悼文の奉読はみな香語の奉読に似て、その力強さと迫力のすさまじさは筆舌に尽くし難いものがあり、宗門や普通の追悼とは遙かに違うという印象を強烈に受けたのである。

私が檀信徒に対する香語が、参考書にあるものを写して読み上げることをせず、首句と結句の各七言二句（又は五言二句）を参考にすることはあっても、中間の「腹」の部分を最も重要にし、ほぼすべてにちかく「宙」で唱え、最後の一転語を「喝」に統一したのは、その頃からこの方であるから、実はまだ20年を大巾に超えているわけではない。それでも故人の近親の方々からは、とても分かり易い、迫力があって有難い、という満足の言葉を沢山いただいている。

もう少し具体的にいえば、「腹」の部分には故人の性格や職業をズバリと表面に出し、それに専心努力した意義を讃え、にも拘わらず諸行万物の無常なる道理を説示し、やや語気を高めて、「何を以てか後人を導かん」「何処にか遊化せん」「生死の関を越えん」「幽情を楽しまん」「蹤跡を没す」「光陰永劫に渡らん」などなど、終句は千差万別であるが、これに続いて「喝！」である。それもただ大声を出せばよいのではなく、迫力があって「端息を止め、次いで腹の底から天地を揺さぶらんとばかりに「カーッ」とやるのである。

「喝」は、漢字の中辞典では最高といわれている『漢字海』の第4版では、①こわがらせる②しかる③大声で呼びかけるなどの意味があり、「喝采」「喝破」などの熟語があげられ、ついで禅門では「喝食」という役職があるとする。たしかにこの役職は大勢が食事を執る場合の職名で、若い者が務める。いずれにしても大声を張り上げることである。また、『岩波国語辞典』にも種々な意味が出ているが、「特に禅宗でのはげましの声」「……成仏せんことを。喝」とあるのが、最もちかい意味のようである。

まあ辞典類にどう出ていようと、わが宗門の宗侶としては自分の意とする先輩の香語集一、二書を座右に常置し、それを参考にして力強い一転語を発声するように努めたらよいのではないだろうか。ご承知のように、わが曹洞宗宗務庁からは『曹洞宗近代香語集』全3巻が刊行されている。実は正直なところ、あの3冊の編集主任は私であり、若い学究者にお手伝いして貰って1年1冊づつを刊行したのであるが、原資料を両大本山の貫首猊下の各香語録から選んだために、余りにも素晴らしく高尚過ぎて、一般には使いこなせず、応用も余り利かないという難点がある。

その意味では、ああした企画が果たして時期に叶っていたかどうかと、今は反省している。ただし、苟も禅師方の香語であるから、いかに高位特定の方を対象としたものが多くて応用し難いとはいえ、平仄や脚韻などは模範的であり、その意味では立派な香語集である。宗門の皆さま方は、どうお考えですか？

喝！

2023年春、私は曹洞禅グラフの取材でアメリカに渡る予定だった。現地で執り行われる北アメリカ国際布教百周年の法要に出席すると同時に、アメリカにおける禅や仏教の取材にあたる予定だった。そしてその一環として、『宿無し弘文　スティーブ・ジョブズの禅僧』の著者である柳田由紀子氏へのインタビューも予定していた。しかし、残念ながらビザの関係で、この渡米自体がなくなってしまい、取材はオンラインに切り替わった。

私は落胆しながら、柳田氏へのオンライン取材に望むこととなった。しかし、今となっては本書とその著者インタビューが、もう一つの趣ある旅であったように思われる。すなわち北米大陸で悩める人々に手を差し伸べるべく、その生涯をささげた乙川弘文の流浪の足跡と、それを八年もの歳月を費やして追いかけた柳田由紀子氏の足跡が交じり合った、味わい深い旅である。

ジョブズと弘文をめぐる8年の旅

矢田海里

『宿無し弘文』の著者インタビューを終えて

ジョブズと禅

柳田氏の旅の始まりは疑念であったといえるかもしれない。その疑念とは、ひとつには、スティーブ・ジョブズの死後、多くの仏教関係者の証言をまとめた本が乱発されたことに端を発していた。ジョブズが禅から深いインスピレーションを受けていたことは、彼の存命中から知られていた。だが、ジョブズの死によってそのことが再びクローズアップされ、IT（情報技術）と禅という組み合わせの新鮮さもあってか、再び注目されるようになったのだ。ただそうした流れは、柳田氏にとってやや首をひねりたくなるようなところもあったようだ。ジョブズと深い関係にあったわけではない人が書いたものや、禅のことをよく知らないままジョブズの生涯を描いたものもあったからだろう。「本当だろうかと思うようなものもあった」と柳田氏は言う。

ロサンゼルス在住の柳田氏は、ジョブズや弘文ゆかりの寺院や、ジョブズに縁のあった関係者を訪ねることが、比較的容易にできる立場にあった。そのことも無数の声を拾い集める長い旅のきっかけになっているという。

ジョブズが弘文に最も接近したのは、自ら立ち上げたアップル社を追い出され、後に再び迎え入れられるまでの、およそ十年の間であるという。柳田氏によれば、その間のジョブズは、弘文を追いかけて海を越え、最後は無一文近くにまでなりながら、弘文の実家がある新潟県の加茂市までやってきたという。

ジョブズが弘文と過ごした日々から何を学んだのかということは、両人とも他界している以上、はっきりとしたことはわからない部分もある。修行の性質上、ジョブズが体得したものが言葉に置き換えられない何かであるということも十分に考えられる。

とはいえ、まったく見当もつかないというわけでもない。柳田氏は、ジョブズが禅から受けた最も大きな影響ではないかと考えていることの一つに「縁起的なもの」があるという。修行を重ねていると、あるとき突然、宇宙と自分が一体となり、ともに生きていると実感できる瞬間が訪れるという。ジョブズが「坐禅をすると直感の花が開く」と言っているのも、このことに近いのではないかと、柳田氏は語る。

ジョブズはアイディアを次々と実現していく才能に恵まれていた一方、気難しさや頑なさがあり、周囲との摩擦も多かったということはつとに知られているところである。たしかに、自ら立ち上げたアップル社を追い出されるという経歴を考えれば、周囲との調和を欠いていたというのも頷けるところではある。

ジョブズがAppleに戻ってからの、もはや伝説的となった成功の要因を、素晴らしいエンジニアたちとの出会いとする説もあるが、柳田氏によれば優秀なエンジニアとの出会いならば、初期のころからあったのであり、それだけでは後年の大きな飛躍の説明にはなっていないのだという。ジョブズが弘文と禅に出会い、「縁起的なもの」に触れて内なる変革を経験したことは、その後の世界的な成功を考えれば、人類にとって運命的な出来事だったと、柳田氏は評する。

永平寺の仏殿に積もる雪を下ろす雲水（昭和41年）

弘文の半生

このようにジョブズの生涯に新たな見方をもたらしてくれるというだけでも、本書は十分に興味深い。しかし、柳田氏の8年に及ぶ旅は、ジョブズその人よりも、むしろその師である乙川弘文の人生へと分け入っていく。とりわけ、目を引くのが宗教者としてアメリカに赴いた弘文の後半生に見え隠れする、ある種の「破綻」のにおいである。

その破綻が何かということを一言で説明するのは難しいが、弘文にゆかりのあった人々の人生、そして彼らと弘文のかかわりが見えてくることで、徐々に姿を現し始める。柳田氏の8年のうちの多くの時間は、それを確認する道程だったと言えるかもしれない。

取材を始めた頃、柳田氏は弘文に対し、「いい加減な新興宗教のお坊さんなのか、本当に禅や仏教を伝えようとしている人なのか、その判断がつかなかった」という。弘文の弟子たちに会うたびに、その浮世離れした様子をいぶかしく思っていったようだ。メールをしても返事が来ない、何度も確認して会いに行ってもいない。やっと会えたと思っても「ちょっと待っていて」と言ったまま4、5時間も戻ってこない。言っていることがほとんどわからない人もいたという。要するに、社会の枠からはみ出してしまうような人が、弘文の周りに集

まっていた。

弘文がアメリカ社会のセーフティ・ネットから漏れてしまった人々に手を差し伸べていた、というだけならば、話は分かりやすいだろう。しかし、実際には弘文自身の人生にも破綻の影は色濃くあらわれていた。年の離れた若い女性といわゆる「できちゃった婚」をしたかと思えば離婚して別の家庭を持ったり、多量の酒を嗜んだりと、仏教の戒めを破ったと見なされることも多々あり、周囲にはそれを快く思わない見方も当然あった。ジョブズとの関係にしても、もともとジョブズには禅に対する憧れがあり、弘文がたまたまそばにいただけだという声もあった。柳田氏が、取材の初期から中期にかけて、弘文に対する疑念を深めていったというのも、無理はない。

こうした弘文の半生に見え隠れする破綻のしわ寄せを最も深刻なかたちで受けてしまったのが、娘のタツコ・オトガワであったかもしれない。

タツコは本書のインタビューの中で、父弘文が宗教者として多くの人を救ったことを認めつつも、自分にとっては人生の痛みでしかなかったという、悲痛な告白をしている。家庭は貧しく、弘文はアルコール依存症であったという。いくら弟子たちが弘文をあがめようと、家にいるのは酒浸りの父だったというのだ。古く狭いトレーラーハウスに暮らしていたころ、一日だけ弘文が酒を飲まなかった日があり、それがタツコの幸せな記憶であった。タツコの母が異国の地で弘文と結婚し、言語も不慣れであったことから精神的に不安定になっていったことも、タツコにとっては少なくない影響をもたらしたに違いない。母と同様、悲嘆と憤怒の中で生きていたというタツコが語る幼少期の記憶は、暗いかげりに覆われており、母も娘も心の傷を背負いながら長らく生きてきたことが伺える。

昭和42年に行われた同安居の会（下段中央が乙川師）

柳田氏は弘文が宗教者としての道を歩むのであれば、家族はもつべきでなかった、という印象を持っているという。弘文の人生に見え隠れする破綻は、それほどまでに決定的で深刻なものであったことを示している。

日米の断層

それにしても、なんと大きな変化だろうか。弘文は永平寺時代に、生涯不犯を誓った宮崎奕保禅師に、自分も同じ道を行くと誓ったほどの生真面目さ、仏道へのひたむきな思いを持っていたという。にもかかわらず、その後数十年、渡米してから他界するまでのあいだに複数の家族を持ち、アルコール依存に陥り、破綻の生活の末に、実の娘に「できることなら父とも呼びたくない」と懐古される地点まで至ってしまった。

この弘文の人生に訪れた極端な生き方の変化、振れ幅の大きさはいったい、どこから来るのだろうか。本書を読み進めていくと、その要因の一つに、日本とアメリカにおける仏教の位置づけの違い、求められるものの違いがあるように思われた。

本書に登場するロサンゼルス禅宗寺の僧侶、加藤和光老師によれば、アメリカの禅には二つの流れがあるという。ひとつは日本人や日系人を中心とした檀家形式で、日本同様、葬式や法事などの行事が主体である。もうひとつは一般のアメリカ人が中心となった、坐禅会やワークショップであるという。

このようにさらりと分類してしまえば、集まってくる人の構成員の違いくらいにしか見えないが、よくよく考えてみれば、その違いは小さなものではないだろう。檀家制度を中心とした日本の伝統的な仏教は、葬式や法事など、人の死と深いかかわりがある。死という目に見えないものを、儀式という形をもって確認することで、我々生きている者は他者の死に触れ、また日常に戻っていくことができる。

しかし、アメリカの人々が仏教に求めているものは、そのような遠い先の死に対する形式としての葬儀などではないように思われる。元来アメリカにはキリスト教という、人々の魂を救うためのれっきとした宗教があり、それが社会に深く根付いている。そのようなアメリカ社会において、仏教に救いを求める人々は、そのキリスト教を基盤とした社会の中でも自らの救いを見出すことができなかった人たちであると言える。彼らが求めているのは、遠い未来の死や、自分ではない誰かの死に形を与えることではなく、今ここにある自分の生の、ひりひりとするような痛みに対する救いではないだろうか。アメリカ社会のセーフティネットから漏れてしまった人々が、浮世離れした様子で弘文の周りに集まっていたことも、そのことと無関係ではないと考えられる。

しかし、この「今ここにある自己の救済」は、当然、禅修行の先に何かを求める姿勢を取らざるを得ない。現地の仏教雑誌には「pursuing happiness」すなわち、幸福の追求ということが謳われているという。いかにも合理的なアメリカの人々は、何事にも目的を持ってしまうというわけだ。いや、仮に目的を持たずに何かを実践するとしたら、それはいったい何のために行われるのか、というのが彼らの本音に近いかもしれない。

一方で、本書の中で加藤老師が「そもそも禅は何も追求しないのですよ。ただ只管打坐あるのみ」と述べているように、何も追求しないということの中に禅の本質があるとすれば、やはりその差は小さなものではない。そのような「断層」に戸惑うからだろうか、柳田氏によれば禅修行にやってきて「それなら、俺が求めているものと違う」といって、帰ってしまう現地アメリカ人も少なくないのだという。私は本書を読み進め、柳田氏の話を聞くうちに、この日米のあいだに横たわる断層が深さに次第に気づき、愕然とする思いがした。

山門横にて　右端が乙川師

思えば私には、一つの期待があったのかもしれない。あらゆる局面で個が膨張して互いに排斥しあうような現在の世界のありように対し、ある種の「虚無」を見出していく仏教が、行き過ぎた個の膨張を和らげ、排斥とは別の調和をもたらしてくれるのではないか、と。もちろんその期待とて、私という個の膨張の結果に過ぎないのかもしれないが……。

いずれにしてもひとつ言えることは、いち読者に過ぎない私が覚えたその日米の断層がもたらす歯がゆさを、弘文という人は生涯にわたって、全身で受け止め、悩み続けたであろうということだ。ひとたび本を読み終えて閉じ、また日常に戻ってゆくことのできる私とは違い、生身の生活者として、そして何より悩める人々を導く宗教者として、その断層とのかかわりの深さは、避けることのできない決定的なものであったに違いない。

救う弘文、救われる弘文

本書の後半、柳田氏の内なる弘文像に、大きな変化が訪れる。弘文の娘、タツコへのインタビューを重く受け止めた柳田氏は「どうしていいかわからなくなって」日本に帰ったおりに、田中真海老師を訪ねたという。

真海老師は、かつて永平寺時代に弘文と修行を共にしていた頃、「婆子焼庵」について語り合ったことがあるという。老婆が草庵を建てててまで面倒をみてきた修行僧に若い娘を送り込む。ところが僧は「自分は女に興味などなく、冬の厳に立つ枯れ木のように少しも心が動じない」と、娘を拒否してしまう。この公案は、女人を抱けば破戒になるが、かといって枯れ木のように水の通わない独りよがりの修行では真の悟りではない、それは「執着しないことに執着している段階」であるという難しい問題を孕んでいるという。弘文は後年、禅の修行の中ではなく、アメリカ大陸の悩める人波の中で、この問いに突き当たったと言えるかもしれない。

真海老師は、柳田氏から弘文の渡米後の足跡を聞いたのち、こう語ったという。「〝願って〟地獄に堕ちたんだ」自分だけが悟りすますのではなく、周囲の人々を本能のままに救い、悩める人々とともに「地獄に堕ちる」道を選んだのだ、と。

2023年9月刊行

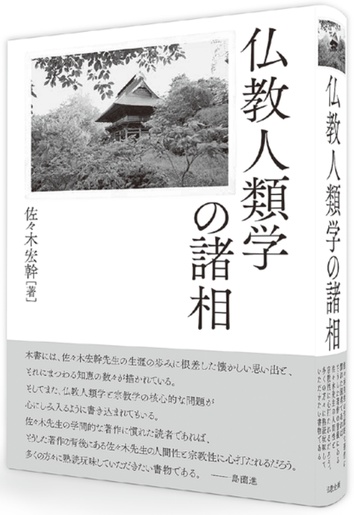
仏教人類学の諸相

佐々木宏幹 著

佐々木宏幹（ささき・こうかん）
1930年宮城県生まれ。駒澤大学文学部卒業。東京都立大学大学院博士課程修了（宗教人類学）。駒澤大学教授などを経て、駒澤大学名誉教授。文学博士。シャーマニズム研究の第一人者で仏教教理や寺院の実態にもよく通じ、日本仏教文化に関する論考も数多い。

シャーマニズムの泰斗、90年の思索

幼少期の著者がみつめた仏教のさまざまな姿を人類学の視点から叙情的に描きだす



仏教企画刊
A5判上製　336頁　定価2,530円
〔本体2,300円＋税〕

ご推薦いただいています

國學院大學教授 **石井研士 先生**
曹洞宗管長　總持寺貫首 **石附周行 禪師**
駒澤大学名誉教授 **佐藤憲昭 先生**
曹洞宗龍泉院東堂 **椎名宏雄 老師**
東京大学名誉教授 **島薗　進 先生**
國學院大學兼任講師 **高見寛孝 先生**
二松学舎大学名誉教授 **谷口　貢 先生**
駒澤大学総長 **永井政之 先生**
京都文教大学準教授 **林ひろみ 先生**
愛知学院大学教授 **林　淳 先生**
国際日本文化研究センター名誉教授 **山折哲雄 先生**
曹洞宗教化研修所　薪水会会長 **山路純正 老師**
（五十音順）

お申し込み：書店にてお求めいただくか、ハガキ・電話・FAX・メールにてご注文ください。
仏教企画

ハガキ	〒252-0116　神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
電話	042-703-8642
FAX	042-782-5117
Eメール	fujiki@water.ocn.ne.jp

佐々木先生との出会い

(1)シャーマニズム研究の始まり

昭和55年に熊本大学文学部に入学した筆者は、翌年2年次へ進級するに際して民俗学コースを選択した。日本文化に興味はあったものの、柳田國男も折口信夫もまったく知らない。他のコース（社会学・地域社会学・人文地理学）よりましに思えたに過ぎない。そのような中途半端な動機でしかなかったのだが、『定本柳田國男集』を1冊ずつ購入しては読んでいる中で、『海上の道』に収録された「根の国の話」に感動することになる。

死んだ人に会える島として柳田が紹介している長崎県五島列島最南端の福江島。どんな島であろうか、死者に会えるとはどういうことかと勉強を続けていく先に辿り着いたのがシャーマニズム研究であった。

(2)駒沢宗教学研究会への入会

シャーマニズム関連文献を集めている時、駒沢大学宗教学研究会（現在は駒沢宗教学研究会）より刊行されている『宗教学論集』に多くのシャーマニズム論が掲載されていることを知った。早速事務局に電話したところ、対応してくれた

だからこそ、弘文の人生にはいくつもの破綻があり、そのような弘文の姿に、悩める人々は逆に安堵したのではないかと。

これは私にとっても、それまで光と思われていたものが影であり、影と思われていたものが光であったというような、大きな転換であった。同時に、私の中にあった弘文の人生に対する「破綻」という見方がいかに浅薄なものかを思い知らされることとなった。おそらく弘文の眼には、自らが「破綻」とみなされてしまう地点まで赴かなければ救うことのできない人々の姿が、くっきりと見えていたのではないか。それゆえに、それまで拠り所としていた、生真面目な宗教者としての在り方を捨て去り、戻ることのできない場所へと踏み込んでいったのではないか。「願って地獄に堕ちた」という真海老師の言葉は、謎に満ちた弘文の生涯に一本の補助線を引き、その一本の線によって見事に弘文の人生を救い出しているように思われた。

弘文の人生は、2002年夏、スイスの山荘で池に溺れた実の娘を助けようとして、自らも溺れ、不意に途切れている。しかし、柳田氏がその足跡を訪ねる旅のさなか、我々読者は懸命に生きた無数のいのちのかたちを目にし、救うことと救われることをいくつも目の当たりにすることになる。それはどこか宇宙的な広がりを持った、実に清らかな旅であったように思われる。

のが当時助手をしていた佐藤憲昭先生である。バックナンバー（1冊1500円也）を送ってもらうとともに、準会員として入会させてもらった。佐々木先生の論文も『宗教学論集』を通じて知ることができた。

(3)五島列島でのフィールドワーク

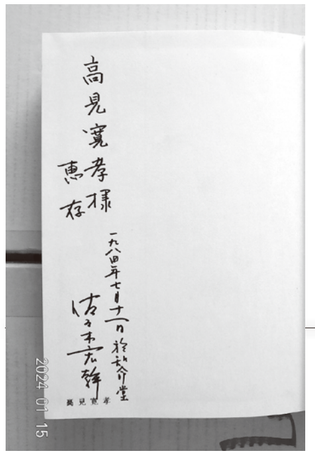
シャーマニズムを卒業論文のテーマとして選んだ筆者は、かねてより気になっていた福江島へと旅立った。「根の国の話」に登場する三井楽（みいらく）町に滞在してシャーマンを探したのだが、それらしい人物はいなかった。地元の郷土史家に相談したところ、福江市内に暮らすひとりの老女を紹介してくれた。その老女こそ死者と語ることのできるシャーマン、大坪ミトさんであった。

大坪さんは幼いころから神が体内に宿っていて、神仏や死者、あるいは動物霊などと直接交流することができた。当時は穏やかに暮らしていたけれども、その半生は並々ならぬ苦労の連続であったという。シャーマンとなる人が共有する人生経験だ。自分が苦労した分、他人に対してはすこぶる親切である。2回目、3回目と訪ねる筆者に対して、「あんたお昼はまだ食べちょらんでしょう」と言っては、御馳走してくれる。他人の幸福を願うのが自分の務めであるとでも思っているようであった。

(4)佐々木先生の集中講義

シャーマニズム研究を継続するべく、筆者は大学院へと進んだ。新設されたばかりの民俗学コースに修士課程を設置する条件として、外部から超大物教授を招くことが求められていた。白羽の矢が立ったのが佐々木先生と竹村卓二先生であった。おふたりとも東京都立大学社会人類学コース出身で、その講義はすこぶる興味を掻き立てるものであった。

写真は、筆者所蔵の『シャーマニズムの人類学』に記された佐々木先生のサインである。「知命堂」というのは、熊本大学キャンパス内にあるゲスト用宿泊施設で、集中講義に来学された佐々木先生もそこに泊まっていた。5日間連続の講義であったので、途中骨休みの意味も込めて学生たちとの懇親会が開かれた。その時知命堂まで佐々木先生を迎えに行ったのが筆者であった。先生におねだりしてサインしてもらったその本は、今では我が家の宝物となっている。



(5)武夫原頭に草萌えて

誰でも知るごとく、佐々木先生は非常に気さくな方である。肩書などに捉われることのない先生であるから、初対面の学生たちとも一気に盛り上がり、懇親会は和やかに進んでいった。途中、佐々木先生が「武夫原頭に草萌えて　花の香甘く夢に入り」と歌い出す場面があった。この歌は熊本大学の前身、旧制第五高等学校の寮歌で、今でも応援団によって歌い継がれている。

佐々木先生はいったいこの歌を誰から仕入れたのであろうか。都立大学時代に教えを受けた馬淵東一先生は五校出身であるから、おそらく馬淵先生からの直伝ではなかったろうか。

「武夫原（ぶふはら）頭に草萌えて」が先生の大のお気に入りだと知った我々は、講義最終日、大学が用意した公用車で空港へ向かう先生を五校時代の赤レンガ校舎前に連れ出した。そこには応援団の団員たちが待機していた。民俗学コースの同期金川千尋君が団長をしていたことから、彼の一声で召集されていたのである。学ラン姿の応援団による「武夫原頭に草萌えて」が合唱される中、佐々木先生は嬉しそうに聞いておられた。

(6)『宗教人類学の地平』と『仏教人類学の諸相』

あれから星霜は流れ、まもなく40回目の夏を迎える。筆者は佐々木先生の周りをウロウロしながら歳を重ねてきた。仏教企画から刊行された先生の『宗教人類学の地平』と『仏教人類学の諸相』の編集に携わることができたのも、何かの縁が続いていたからであろう。

その編集作業の中で知ったのは、佐々木先生が幼いころに両親と死別し、大変な苦労をされながら学者の道を歩んで来たということであった。他人に対して常に思い遣りの心で接している先生の人生に貫流しているのは、小さい頃から背負ってきた苦労の2文字ではなかったのか。シャーマンの人生とどこか重なり合うところがあるようだ。

「一切の生きとし生けるものは、幸せであれ」（『ブッダのことば』）とする仏教思想を身に付けた佐々木先生が、他人の幸福を切に願うシャーマンの研究を志したのも偶然の一致とは思えない。この2冊の本を通じて我々は、佐々木先生の学問と人生に対する思いを知ることができる。

國學院大學兼任講師
高見寛孝

編集後記

藤木隆宣

今年も早いもので1か月が過ぎた。通信74号でご紹介した方は11月にお亡くなりになり私が仏界にお送りした。お父様が守っておられたお仏壇を誰が守るかは四十九日を迎えるにあたってご兄弟で話し合うことを提案したが、結果はお仏壇を守る方がいなくお墓に納骨をして四十九日は終った。

昔からお仏壇は一家の守るべき大事なものだったが、今はそうでもなくなってしまったようだ。少子化が一因とも言えなくはないが家族関係が薄くなっているなど他にもあるようだ。この事はお寺が、曹洞宗が真剣に考えないといけない大問題と考える。今までの常識が通じない時代になってしまった。仏壇がご一家の仏教徒としてのシンボルだったがそうでもない時代になったようだ。

最近読んだ本に『仏教抹殺―なぜ明治維新は寺院を破壊したのか―』があるが、著者は浄土宗僧侶鵜飼秀徳師で文春新書2018年発行の本だ。

考えさせられる内容が多く、うかうかしておられない気持ちになった。これからの時代は檀信徒との向き合い方を変えることではないだろうか。葬儀、法事の付合いだけではお寺と檀信徒との真の関係には発展しないように思う。寺院の成り立ちの背景、現在の檀信徒との繋がりもそれぞれなので一つのカテゴリでは論じることができないが、大きく変えないとお寺は持たないが私の持論だが読者各位の持論を弊誌ではお待ちしている。

私の本務地永正寺は私が3代目の新しいお寺だ。お寺であればお葬儀、ご法事が頼まれると言う時代は終わった。お墓がないお寺だから、ご近隣の方に親しまれるお寺を目指しているが、つくづく関係性があることの重さや大事さがわかる。ないゆえに一つの企画をすすめるのに周知することの難しさに向き合っている。

ここ2年間は次のことを企画して続けている。お寺の主催としては毎月第1日曜日は坐禅会、月1回日曜日に哲学者内山節先生の寺子屋の開催、毎月第3土曜日に写経・写仏教室、毎月最終金曜日に永正寺こどもおとな食堂、地元の社協等が関係している行事「北沢地域デイ」が毎週木曜日に、毎週土曜日にヨガ教室がある。年に一度の行事では12月26日にお餅つき会を企画して3年、参加者が一番多いのが現状である。他は3年目に入ったが浸透させるのは難しい。組織が出来ているお寺がうらやましい。

令和5年のお盆法要に参列者をグループ分けして身内をなくされてからのお気持ちを聞く機会を持ったところ、いろいろ悩みや今の気持ちが多く出て好評だったようだ。日常にこのような機会が多くあった方が良いと感じた。

さて、『仏教抹殺』の本に戻ろう。「廃仏毀釈」は明治維新の政策ではあったが、今後は国民がお寺を僧侶を見て判断することになるだろう。令和の「廃仏毀釈」は私達の行動に向けられるだろう。そういわれると私も自信がないがそろそろ旅立ちを考える歳になってきた身分、今後のお寺や僧侶の在り方を模索する方がたへのお願いでもある。お寺は自信を持って社会の一員としての誇りを持つべきと考える。それは今後お寺が寺族がどう生きるかを育むことにも繋がる。今はあまりにも社会の一員としての考え方がなさすぎる。これでは自然にお寺が消滅に繋がる事に他ならない。そういう時が来るのはそんなに遠い話ではない。もう始まっているのだ。今の世相を観るとなんと危うい時代である。

仏教徒として仏教の教えをもっともっと発信しなければならない。わが宗には幸いにも檀信徒にわかりやすい「修証義」があり日常の読誦経典として檀信徒と共に読誦したいものだ。お寺を選ぶのは檀信徒であることを肝に銘じたい。

2024夏・お盆号 特集予告

2024年5月31日 発刊予定

曹洞禅グラフ

169号

前曹洞宗国際センター所長

藤田一照老師 インタビュー

現在の曹洞禅を代表する僧侶の一人。
葉山の茅山荘から発せられるメッセージは、
世界からも注目される。
明るく軽やかな人柄で、多くの人びとを惹きつける
藤田老師へのインタビュー。

ふじた いっしょう
1954年、愛媛県生まれ。東京大学大学院で発達心理学を専攻中に坐禅に出合う。29歳で得度、33歳で渡米し17年半にわたりヴァレー禅堂で指導。帰国後も坐禅の研究・指導に邁進。著作は『現代坐禅講義－只管打坐への道』など多数。共著・訳書も多数発表。

手まり学園

寄附者御芳名（敬称略）

R5.11.1～R6.1.10

所在地	寺院名（個人名）	金額
神奈川県	青木義次（122）	5,000
神奈川県	宗泉寺	10,000
千葉県	椎名宏雄	10,000
千葉県	吉岡大龍	3,000
神奈川県	青木義次（123）	5,000
山口県	清木隆法	10,000
青森県	大乗寺	20,000
埼玉県	吉祥院	20,000
神奈川県	青木義次（124）	5,000
千葉県	吉岡大龍	3,000
合計		91,000

てまり学園にご支援をいただき
誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物

（★部数により割引があります） すべて税別価格です

『修証義』解説 丸山劫外著	1,400円★
『まんが問答一期一話』 文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『葬送のしおり』 長井龍道著	30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』 須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 霊元丈法著	150円★
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って	500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著	500円
『宗教人類学の地平』 佐々木宏幹編著	2,300円
『仏教人類学の諸相』 佐々木宏幹著	2,300円

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月10日
夏 お盆号	5月31日
秋 彼岸号	8月20日
冬 正月号	10月31日

1部 200円

9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申込み

仏教企画

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②お客様番号 ③電話番号でも可能です。